ＫＳＫＱ第三種郵便物認可＜サロン・あべの＞通巻５２２４号２００６年７月15日

一九九一年九月三日第三種郵便物認可（毎日発行）

## みらいをつくろう！

# みらい塾

**〈サロン・あべの〉６月の出会い**

平成18年６月17日（土）午後１時－４時、育徳コミュニティーセンターで〈サロン・あべの〉６月の出会い「みらいをつくろう！みらい塾」のお話を伺いました。

ＮＰＯ法人「み・らいず」の中で取り組んでいる「みらい塾」が、府内で先進的な取り組みをされているコミュニティー・ビジネス（ＣＢ）を表彰する「おおさかＣＢアウォード２００５」を受賞したことを記念して、ＮＰＯ法人「み・らいず」の代表・河内嵩典（**写真＝次頁**）さんにお話を伺いました。同賞は、行政、経済界、市民セクターが共同で地域課題の解決をめざすＣＢを応援するものです。

＊ＣＢ（コミュニティー・ビジネス）とは、地域や社会には多くの課題があり、その中で地域住民の生活に密着に関わる課題がある。その課題を解決するためにビジネス的手法で取り組むことをコミュニティー・ビジネスと捉えている。その名のとおり、「コミュニティー」と「ビジネス」という二つの視点が調和する新しい形の事業です。

○活動のきっかけ

もともと学生時代に大阪市のガイドヘルパー制度で障害者の外出支援などのボランティア活動をやっていた。作業所で実施する年に１度の夏のキャンプに参加者がすごく楽しみにしていた。自分たちで、年に１回だけでなく月に１回くらいで、できることはないかとガイドヘルパーサークルを立ち上げた。大学卒業時に進路を選択しようとするとき、自分たちがやってきたこ

とをやめるのはしのびないと思い、継続して活動していく方向はないかと模索していたところ、ガイドヘルパーを仕事にできないかと考え、阪神大震災の後にＮＰＯ法人の法律ができたことを知った。１年間の勉強期間を経て、自分たちもＮＰＯ法人「み・らいず」を２００１年に立ち上げることになった。仕事としてやっていこうとしたが、見込みの甘さもあり、なかなか運営が軌道に乗らなかった。が、支援費制度の導入がされたことがあって、事業的に安定していった。われわれの活動は、ガイドヘルパーの派遣以外に余暇支援というイベント事業など多岐にわたっている。

○活動内容

・イベント

具体的にはキャンプに行く、公園に行く、釣りをするなど子どもから大人まで楽しめるイベントを行っている。

釣り大会は、淡輪のヨットハーバーを利用して会員以外もオープン参加で１００～１５０名くらいで行っている。竿を投げ、糸をたらして釣りをすることは、車いす利用者の方が行う場合、海に近づけば近づくほどバリアフリーではないが、浜辺の移動とかトイレなどのハードの問題をひとつずつ取り除いていけば楽しめる。冬はスキーや雪遊びも企画してスタッフが協力してイベント活動を行っている。

ＮＰＯ法人に求められているのは、現在、行政には財源がなく、景気の回復もままならない中で、地域の問題は、地域の人々が地域の資源を活用してビジネス的手法で取り組み、地域を活性化していくことである。例えば、２００７年は団塊の世代が定年退職になる。その時のセカンドステージをどう過ごしていくかというとき、その人が培ってきた能力を資源として活用していくことが考えられる。

・みらい塾

みらい塾は、学習を支援する事業で、学生ボランティアが講師となって活動している。単に知識を覚えるのではなく、考えながら一人ひとりの意欲と好奇心を育む「学び」の場を提供していく。例えば、「？＋？＝７で？の中に入る数字はなにか」といったようにいっしょの目線で考えるような形で進めている。こうした活動は行政の助成金を活用して事業を展開しているが、問題を提起しても、儲からないし、行き届かないところは誰もやりたがらない。しかし、先立つお金がないと活動が進まない。学生時代のボランティア活動では、自分のお金の持ち出しもあった。活動を実現するため助成金を申請する必要があり、そのためには、まず、計画を立て課題の問題解決を継続して行うことができる事業であるかどうかが大切である。

・まちづくり

住之江区のわが町会議に参加して、地域課題は顔の見えない街になってきており、子どもた

ちの安全や環境問題、福祉問題とか、それぞれの分野で活動しているのは点であり、横のつながりがなされていない。お互いの活動を知ってもらう機会に、地域のわが町会議に参加していくにつれ顔見知りになった。「すみのえのみ」の冊子創刊にさいして、読者を限定せず、幅広い人たちに、自分たちの活動を伝えるために、地域の有名な特産品などを載せていくことで情報誌を通じて地域の連携を広げていくことができないだろうかと考えた。老舗の菓子工場や地域になじみのある場所などを取り上げた。

・講座

障害をもつ人や高齢の方々の生活を支援するために必要なヘルパーの資格講座や、ボランティア講座などを開いている。

・ほっとスペース

不登校やひきこもりなどと呼ばれる子供たちが「ほっと一息」できる居場所づくりをしている。自己表現や自己決定をする力を持てるよう、コーディネーターや学生を中心としたメンタルフレンドとともにサポートしている。子どもたちが自分の意思に基づいて暮らしを選択し、社会に参加していく橋渡し役となることを目指している。

・ノーマライズ

障害をもつ人が描いた絵や書などをオリジナルグッズとして制作・販売している。障害をもつ人々の才能を発信するプロジェクトである。

・ヘルプセンターと・らいず(to rise)

障害をもつ方で、日々の生活に介助を必要とする方に対し、制度を使ったヘルパーの派遣を行っている。

いくら良い制度ができても理解ができなければ進まないと思う。大人だけでなく子どもたちの柔軟な意見を取り入れることが大事ではないかと思っている。そして福祉だけでなく地域とともに地域に根ざした活動をしていきたい。

参加者に感想や意見を聞きました。

・地域でも横のつながりがほしい。

・自立支援法が改正され、これからどうなるのか。

・いろいろな事業を行うため大きな組織にしているのか。

——人的余裕はないので、事業ごとの単独の担当者はいない。やりくりしながら、みんな何らかの役割を兼務している。

・み・らいずの名前の意味は。

——ひらがなで分かりやすいことをまず第一に考えた。障害をもつ、もたないに関わらず、何らかの支援を必要としている、家族、そしてその人たちを支える人たち、一人ひとり(私=me)が上昇(=rise)していくことで「み・らいず」に。それに「未来図」の意味も掛けてという思いがある。

活動を行う上で、高い志や資金面が大切であるが、なにより人材やネットワークが財産であると感じた〈サロン・あべの〉6月の出会いでした。

(参加者25名　山村貴司)

29

# 邦子、‥ん歳の手習い。

## 障害者の自立
### -施設からの自立生活運動-

立岩真也は日本における自立生活運動の原点になっている運動として、1970年代の神奈川を中心とする青い芝の会の運動とその運動と関係しながら、その少し前から起こった府中療育センターの運動をあげています。

東京都府中療育センターは、1968年に東洋一といわれる超近代的な医療施設として開設されました。センターは重度の身体障害者、知的障害児・者、重症心身障害者を対象とする定員400名の大規模施設でした。東京都は1970年12月に在所者のうち重度の身体障害者、知的障害児・者を市街から遠く離れた施設(多摩更生園)に移転することを在所者の意向を無視して計画しました。在所者有志は1972年9月、美濃部都知事に「移転中止」を求めて要請書を提出して、会見を申し入れましたが、都側に拒否され、同年同月18日、この施設移転に反対して、東京都庁前でテントを張って、3年に及ぶ座り込み闘争が起こりました。移転への主な反対理由は、①障害の重度と軽度による分類収容、②施設の移転先が市街地から遠く離れていること、③施設の民間委託による処遇の劣化の予測などでした。

この闘争により、外出・外泊の回数制限、持物、飲物類の規制、男性職員による女性の入浴介助などの施設内でのこれまでの管理体制の問題点も明かにされました。その後、1973年以降、移転が実施されましたが、闘争は続き、1974年9月の都知事との交渉以降、継続的な交渉が行われ、運営に関する協議会の設置などで双方が合意し、運動は終結しました。

この闘争の中心的役割を果たしたのが、2人の女性障害者でした。一時は支援者が100名を越えることもありましたが、長い闘争の間、内部分裂が繰り返され、支援者が激減する中で、最後まで2人の女性はテントで闘い続けました。岡田英己子は、この運動が福祉をシンボルとする美濃部都政に衝撃を与え続けたのは、「重度身体障害者で、それも女性が都庁前に抗議のために座り込むという従来の日本では考えられない行動をとった」からであり、「都は重度障害者政策の抜本見直しを迫られ、新設される療護施設に当事者の声を反映させる施策」をとっていくようになったとして、女性障害者のこの運動に果たした役割の大きさを論じています。そして、この運動は施設の改善に留まらず、この運動を経て、施

設から出て生活する障害者が現れ自立生活運動につながっていったという点においても果たした役割は大きかったといえます。

センター闘争に参加した三井(旧姓新田)絹子さんは、闘争終了後、センターに戻りますが、1975年に施設を出て地域での暮らしを始め、「地域であたりまえに生きる」をスローガンに「くにたちかたつむりの会」を発足して、障害者の自立支援活動を始めました。彼女の著書の巻頭には、「私は人形じゃない。手も足も口も不自由だけど、わたしは人形じゃない。一つの偉大な人間なのだ。障害者としてではなく1人の人間として『普通に』生きたい」と書かれていますが、その言葉どおり彼女は介助を受けながら、結婚して子育てもしながら、地域で暮らしてきました(三井絹子著『わたしは人形じゃない』千書房、2006年より)。

6月11日に大阪で行われたDPI(障害者国際)日本会議全国集会で、三井さんが1参加者として地域での障害者の自立生活の大切さを訴えておられたのが、私には印象的でした。

(定藤邦子)

## 晴れのち晴れ 94

### 玉

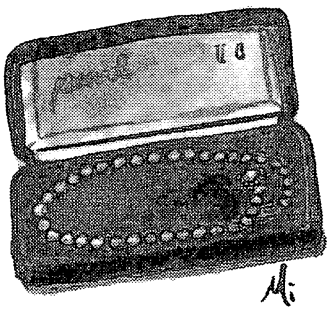
稲垣恵雄

「玉」という言葉を辞書で繙くと「美しい宝石類、多くは彫琢して装飾するもの」とある。そしてその他に

○ 真珠、しらたま
○ 美しいもの、大切なもの
○ ほめること
○ 丸いもの、球形のもの

などの意味がある。

「玉」に関する熟語として「玉虫色、玉の輿、玉の汗、玉にきず、飴玉、うどん玉、ラムネ玉」などがある。また「善玉、悪玉」という語いもあるが、「玉」という言葉の意味からすると、すべて「善玉」のような気がする。ちなみに万葉集(3)にも「掌中の玉」「夜光る玉といふとも」という言葉がある。



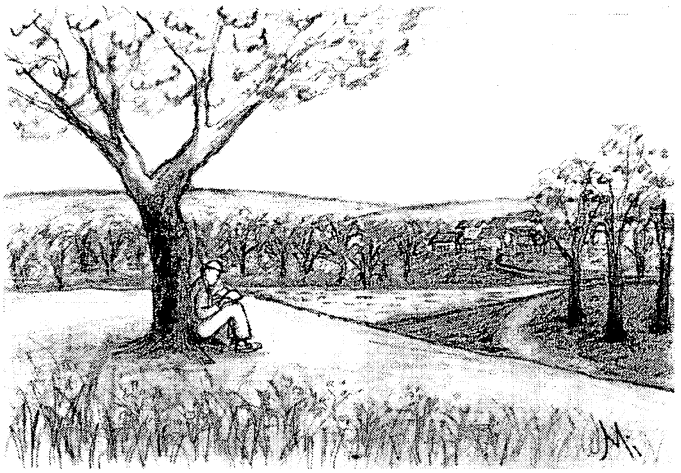
私は寺院で育ったので「玉」と言えば数珠玉を連想する。数珠玉も他の玉と同じように使えば使うほど、磨けば磨くほど光沢が出て価値がある。言うまでもなく数珠は仏前で謝念をこめて合掌する時に使用するものだが、それと同時に数珠は「決して抵抗はしません」「すべておまかせします」という手錠の役目も果たしているそうである。

ところで今は選挙の投票結果を集計する時によく「正」の字を使うが、江戸時代の商人は集計する時にそろばんからヒントを得て、「玉」の字を使っていたそうだ。そう言えば「正」も「玉」も同じ五画である。

いつも拙くて平凡な文章しか書けない私だが、いずれ珠玉の短編を書けるようになりたいと思っている。

# 趣味としての読書

「読書が趣味です」と、かつて書くことはあったが、本当は大学の教員として必要な本を読むだけのことが多かった。研究のため、授業のために読んでいるのであって、実際にはとても趣味とよべるものではなかった。



ところが、この数年は読書がまさに私の趣味になっている。仕事や研究にまるで関係のない本を図書館からバックいっぱいに借りこんで、通勤電車のなかや夜中の自室で夢中になって読んでいるのである。

読む本には特にジャンルがあるわけではない。学生たちには「古典を読みなさい」と言っているが、私は素人が書いた自費出版のような本も読むことが多い。たいていは新聞に載ってある本の広告を切り抜いて、そこから図書館にリクエストをする。それで本が面白かったら、その著者の名前を使って、また本を探す。

昔と違って便利なのは、インターネットで図書館の本が検索できることである。アマゾンなどのインターネット上の書店でも本を検索できる。そこでは読者の感想も掲載されていて、それが選書の際に役に立つ。アマゾンでは不特定多数の人が作成し、しかも誰もが使える「本のリスト」が掲載されていて、それもまた面白そうな本を探し出す手引きになっている。

読書の趣味は図書館を使いさえすれば、お金がかからない。読んでみて「面白くなかったな」と思っても、買った本ならお金が悔しいが、借りた本なら何も惜しくはない。途中で面白くないと思ったら、斜め読みをして最後まで目を通してしまう。そして書き手が著名な人なら、辛らつな書評を書いて、私のホームページに載せてしまう。これが自分自身は上手く本を書けない私の、評論家きどりのストレス解消になっている。

面白かった本にも書評を書いている。この数年で読んだ本の記録は三百冊近くになっているが、すべて私のホームページに掲載している。誰が読んでくれるわけでもなく、何の役にたつわけでもないが、それでも、こんなことをしているのは、それが私の趣味になっているからだろう。

私が、こんな「趣味としての読書」を始

めたのは、自分の年齢を自覚したからだ。残念ながら、もう先は見えている。いまさら別の人生を歩むわけにはいかないのである。

たとえば、昨夜は殺人犯で逮捕されながら何度も脱獄、入獄を繰り返した人の話を読んでいたが、その内容は、いまの私には何の関係もないし、そこから何かの教訓を学ぼうというつもりもない。ただ、そういう人生があったという事実に面白さを感じるし、またそういう人生にひかれ、わざわざ本を書いた人にも私は興味を覚える。

これまでの私の読書は、自分に知識や考え方を身につけさせるための手段であり、いわば「何者かになるための読書」であったと思う。しかし、人生の後半を迎えた現在（いま）、「私がなれなかった何者かを知るための読書」をしているのである。自分の残りの人生の延長線上には無いように思われる世界や、伸ばせるだけ伸ばしたコンパスの足の先も届かない人々の横顔を、そっとのぞき込むような読書を、私は楽しんでいるのかもしれない。（知）

**声で読書のお手伝い**

## 音訳テープのご案内

音訳グループ「糸でんわ」のご協力で〈サロン・あべの〉紙第240号の音訳テープが出来ました。

■音訳テープ文庫

(a) 〈サロン・あべの〉紙は、第１号より第240号までそろっています。
(b) 〈サロン・あべの〉十周年記念誌「はあとが、はろー！」
(c) 絵本「未知の記憶」（作・絵 中川勝彦）
(d) 「ラジオたんぱ」放送「〈サロン・あべの〉平成7年5月の出会い」放送分（３０分）
(e) エッセー集「逃げた『ヨナ』～ボランティア活動の周辺～」（岡本栄一著＝糸でんわ音訳）
(f) 「キミたちだけじゃ困るんだ～身障者だけで旅した十余年～」（山田誠１９９５・２・２２著 ＝糸でんわ音訳）
(g) 「金子みすずへの旅」（島田陽子著＝糸でんわ音訳DJ）
(h) 「夕やけ空のオニヤンマ」（牧口一二著＝糸でんわ音訳）
(i) 「ガベちゃん先生の自立宣言」（曽我部教子著＝糸でんわ音訳）
(j) 「セルフヘルプグループ」（岡知史著＝糸でんわ音訳DJ）
(k) 「名物　天王寺かぶら」（猿田博創作　難波利三監修＝大阪市立天王寺図書館制作）
(l) 「知らされない愛について」（岡知史著＝ぽけっと音訳）
(m) 「愛　ひとり旅」（奥田真祐美著＝糸でんわ音訳）
(n) 「奥田真祐美のシャンソン手帳」（奥田真祐美著＝糸でんわ音訳DJ）
(o) 「もうちょっと知っとく？　私たちの阿倍野」（難波りんご著＝糸でんわ音訳DJ）
(p) 「猫とシャンソン」（奥田真祐美著＝糸でんわ音訳）
(q) 「ほんの少しの神に近い部分」（岡知史著＝糸でんわ音訳）
(r) 「勁くしずかに」（河野勝行 編・著＝糸でんわ音訳）
(s) 「たまごが　ポン！」（稲垣恵雄著＝糸でんわ音訳DJ）
(t) 阿倍野名所旧跡いろはがるた（猿田博＝糸でんわ音訳）
(u) 交わりのなかで　～ホームヘルパー残像～（加藤みどりさんを偲ぶ文章を作る会著＝糸でんわ音訳）
(v) 冨田慶子出演の「ちょっといい話」（朝日放送05.6.26と05.9.18）の録音テープ

ご希望の方には、ダビング、または貸し出しをしますので、冨田（☎０６・６６９１・１０２８）まで。音訳の後のDJ印はディジー録音。

# 「谷間」にこだわり続けて 26

赤松 昭

## －若者と家族の会の歩み（その7）－

会が地域別に活動するようになって、大きな変化が会のメンバー間にみられるようになりました。それは、今までどこか遠い目標のように思えていた、「当事者が地域で生活する」ことに、当事者と家族の目が次第に向くようになってきたことです。それは、お互いの顔が見えるようになったためでしょう。そして、その要求もより具体性を帯びるようになってきました。「作業所が欲しい」「就職したい」「本人が一人住まいをしたいと言っている」「とにかく、本人の日中の居場所が欲しい」。しかし、こうした要望は、会の代表者が1年に数度、市の担当者と「行政交渉」したとしても、叶えられるものではありません。やはり、「活動の実態をもつ組織」「行政との日常的な交渉の拠点」が必要だという認識が、こうした要望をひとつひとつ検討することで会のメンバーに高まっていったのです。もちろん、これまでの当事者・家族の会の存在を否定するわけではありません。しかし、これまでの活動では、どこか「行政がやってくれる」「どこかの施設がこの問題に取り組んでくれる」と考えるフシがないわけではありませんでした。ところが、一向に動かない行政の姿を目の当たりにして、「他人がやらなければ自分たちがまずやる」という気持ちを会のメンバーがもつようになったのです。これも、地域単位で活動を行ったゆえの効果ともいうべき結果でした。

では、そうした活動を担う組織をどのようなものにするのか？　次に話し合われたのが、この組織論でした。最初は社会福祉法人を作ろうという声も出ましたが、以前ほどではないにしろ、資金面などでそれを行うにはやはり高いハードルがあります。議論を重ね、出た結論がＮＰＯを作ることでした。さっそく有志が集まった設立準備委員会が立ち上がりました。今から2年前、２００４年の春のことです。以降、1カ月に2回、多い時はほぼ毎週、委員会のメンバーは集まって法人の構想を練り始めました。とはいっても、何から何まで1からのスタートです。当然、何から手をつけてよいのか分かりません。白紙の申請書類を前に頭を抱えることもたびたびでした。しかし、幸いにして既に地域で活動している障害当事者の方々に知恵を借り、そして協力者を紹介いただくことによって準備は順調に進みました。そして、２００５年12月、ＮＰＯの設立申請書類を大阪府に提出したのです。

（続く）

---

「ひとつずつ　ひとつだけの世界」（池内沙織）はお休みです。

# 美智子のこんな話

岸田美智子

## 自立支援法で自立生活ができなくなちゃった

### 女性ボランティアさん大募集・・・

私は、住吉区で一人暮らしを始めて、10年目になる重度の女性障害者です。一人暮らしといっても、1日24時間、365日、ヘルパーさんが必要です。日中は自立生活センターでピアカウンセラーとして、常勤スタッフとして働いています。そんなこともあり、勤務時間に合わせた生活介助が必要です。

今年の4月から障害者の福祉制度が新しく大きく変わり、「障害者自立支援法」という制度がスタートしましたが、そのお陰で(?)今までの自立生活が公的な制度だけでは、維持できなくなり、私の場合、自費で介助者を雇う事も出来ない(生活費の問題があるため)状況です。なので、一人でも多く女性ボランティアさんを募集しています。ヘルパー資格や、年齢制限など、一切ありません。車いすへの移乗などで、身体介助があるので、体力のある方、大歓迎です。1週間に1回から1カ月に1回でもOKです。ご連絡お待ちしています。

□時間帯＝
月曜から金曜日の夕方6時-9時(時間は短くなってもかまいません)

□介助内容＝
・住吉区長居の職場から歩いて15分程度の自宅に帰る介助
・夕食時の食事介助
・自宅での生活介助、トイレ介助、歯みがきなど

□交通費＝
必要な方は1回500円までならお支払します。

□連絡先＝岸田美智子
TEL・FAX 06-6693-2712(自宅)
＊留守番電話が多いのでFAXかメッセージで連絡先とお名前など入れておいてください。

## ありがとうございました。

カンパ、お菓子・写真・ビデオテープ・バザー用品の寄贈、また、サロングッズのお買い上げなど、ありがとうございました。

カスタネット、サロンいたみ、サロンひだまり、池内沙織、今西美奈子、岡本正敏、神谷君栄、近藤千枝子、曽根利弘、高濱吉増、竹野良枝、照井邦子、野村嘉寿子、東百合子、平岡太、松村順子、道川内喜美子、宮崎喜代子、その他の方々。(敬称略)

## お知らせ

### ＜サロン・あべの＞８月の出会い

内　　容：バザーの店「さろん亭」を開店
サロングッズや、タオル、石鹸などお買い得の品 を山積みにして、みなさまのご来店をお待ちしています。

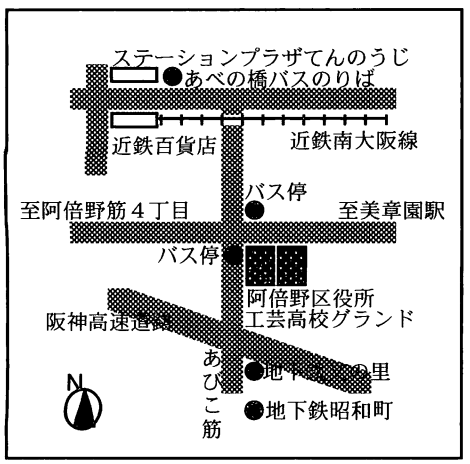
日　　時：８月６日（日）午後３時～６時

場　　所：あべのカーニバル
なんでも市会場
大阪市阿倍野区文の里1-1-40
阿倍野区役所裏、工芸高校グランド

交　　通：地下鉄御堂筋線
「昭和町」駅北へ10分
地下鉄谷町線
「文の里」駅北へ５分
市バス・赤バス
「阿倍野区役所」停留所前

＊当日の販売のお手伝いをしてくださる方、品物をご提供いただける方、ご連絡お願いします。

問合せ先：☎ 06-6691-1028（冨田慶子）




## ききみみずきん

### JR阪和線、今昔

私が電動車いすに乗り、初めて利用した公共交通は，鶴が丘駅から乗ったJR阪和線でした。昔の駅は、改札口からホームへなだらかな坂になっていました。電車に乗るときは、職員がホームと電車に板を渡してくれましたが、降りる時の迎えはありませんでした。後ろ向きになって勢いよく飛び降りました。地下鉄にエスカレーターやエレベーターが付いても乗車時のスロープ板は、なかなか用意されませんでした。周りの人たちに声をかけて車いすを持ち上げるお手伝いをお願いしていました。今の地下鉄は、乗るときも降りるときも職員の方がスロープを用意してくださるので安心です。先に述べました阪和線は南田辺から我孫子まで、今年５月末に上下線とも高架になりました。そこで、先日我孫子まで行く機会があり、高架になった鶴ヶ丘駅に初めて行きました。小さなひなびた感じの駅がおしゃれな雰囲気になっていました。エスカレーターとエレベーターがあり、電動車いすで行くと職員が小鳥のさえずりが聴こえるホームまで案内してくれて、スロープ板で乗り込むことが出来ました。下車駅にも職員がいてエレベーターまで案内していただきました。地下鉄と阪和線の違いは、空があるかないか・・？　いいえ、電車のスピードが違うことでした。ホームで待っている間に、ゴーと言う音と共に通り過ぎたのは関空に行く「はるか」だったり、快速であったり。地下鉄とは違う風圧を感じてビックリしました。　（け）

# SALOON 勝組ニュース

**８月はどこのサロンの、どのテーマがお気に入りですか。いい出会いしませんか。**

**■「サロン淀川」８月の出会い**
日　　時：８月20日（日）午後１時30分～４時
内　　容：テーブル菜園で、ミニ野菜を育てませんか－ミニポットで癒しとやすらぎを－
ゲ ス ト：竹岡太一氏
（障害者福祉作業所「たけのこ」施設長）
会　　費：なし
場　　所：淀川区民センター「やすらぎ」
大阪市淀川区三国本町２－１４－３
問い合せ先：淀川区社協（ボランティア・ビューロー）☎０６－６３９４－２９００
E-mail：sorajii@iris.eonet.ne.jp

**■「サロン・にしよど」８月の出会い**
日　　時：８月26日（土）
内　　容：未定
場　　所：未定
問い合わせ先：西淀川区在宅サービスセンター
☎０６－６４９４－０６３５
中本☎０９０－９８６４－９６７８

**■サロン「アイ」８月の出会い**
日　　時：８月12日（土）午後１時30分～４時
内　　容：初めてのバザー
会　　費：なし
場　　所：「おかちやま」２階ボランティアルーム
大阪市生野区勝山北３－１３－２０
問い合せ先：生野区社協（ボランティア・ビューロー）☎０６－６７１２－３１０１
○お知らせ：サロン「アイ」だよりの音訳テープが出来ます。ご希望の方は、西浦まで。
☎０６－６７５７－８５７４

**■「サロン・にし」８月の出会い**
日　　時：８月13日（日）午後２時～４時
内　　容：暑中見舞いの絵はがきを作ろう！
☆用具はこちらで用意します。
場　　所：西区在宅サービスセンター第１会議室
大阪市西区新町４－５－１４
☎０６－６５３９－８０７５
会　　費：なし
問い合せ先：関口　☎０９０－４２８１－５６４１

**■《てくてく・すみよし》８月の出会い**
日　　時：８月20日（土）午後１時30分～４時
内　　容：１０周年記念パーティー
お土産付「てくてく１０周年の歩み」CD
会　　費：３０００円
場　　所：長居公園内ユースホステル
申し込み締切り：８月１５日
申し込み・問い合せ先：
山本篤江☎０６－６６９２－８４１１
携帯０９０－５１６８－５９７７

**■「サロン・つるみ」８月の出会い**
日　　時：８月６日（日）午後１時30分～４時
内　　容：ここへ来て「知る」ことからはじめよう！
－女子バスケットボールチーム「カクテル」との出会いから－
パネラー：河野靖代さん
会　　費：なし
場　　所：鶴見区民センター３階
大阪市鶴見区横堤５－３－１５
問い合せ先：鶴見区社協（ボランティア・ビューロ）
奥井☎０６－６９１３－７０７０

**■「サロン北」８月の出会い**
日　　時：８月19日（土）
午後１時30分～３時30分
内　　容：くつろぎのライブタイムを貴方に！
－ライブの空間を楽しみながらピッコロベースで聴くジャズ－
演　　奏：伊藤修二氏（ピッコロベース奏者）
参 加 費：無料
場　　所：障害者福祉作業センター「たけのこ」
大阪市北区本庄東２－６－１１宝来堂ビル１階
問い合せ先：障害者福祉作業センター
「たけのこ」内☎06－6372－8074

**■「サロンいたみ」**８月の出会いはお休みです。

●8月6日「さろん亭」が開店します

買いに来て！

連絡先　冨田慶子　545-0021 大阪市阿倍野区阪南町6-3-26 TEL/FAX 06-6691-1028

合本（がっぽん）が出来ました。２１５号（平成１６年４月）から２３７号（平成１８年３月）までのサロン・あべの紙が１冊になっています。月々の出会いの様子をふり返ってみるのもよし、ちょうど、定藤邦子さんと赤松昭さんの連載が始まったばかりで、連載をまとめて読み返すのもまたよし。この機会に、読み残したもの、もう一度じっくり玩味したいもの、がございましたらどうぞ。サロン文庫に備えてありますし、貸し出しもします。（石）

＜サロン・あべの＞VOL.２４１　発行：平成１８（２００６）年７月１５日　定価￥１００
編集人：＜サロン・あべの＞運営委員会　表題：中西利香・筆　文中イラスト：石田美禰子
事務局：〒545-0021 大阪市阿倍野区阪南町６－３－２６ 冨田慶子方＜サロン・あべの＞
TEL・FAX 06-6691-1028　　郵便振替口座：サロン・あべの 00950-9-26941
印　刷：セルフ社 〒546-0044 東住吉区北田辺町 4-23-2 ミスターＤビル２Ｆ TEL06-6719-8212
本紙はホームページでもお読みいただけます。書庫は、http: //pweb.sophia.ac.jp/~t-oka/salon/

発行人：関西障害者定期刊行物協会［大阪市城東区東中浜2-10-13 緑橋グリーンハイツ１F］

一九九一年九月三日第三種郵便物認可（毎日発行）